
百人異ッ種！

橘ツカサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百人異ツ種！

【Nコード】

N9684U

【作者名】

橘ツカサ

【あらすじ】

ある学園に君臨する専制生徒会長、二条諦華。彼女はお特異の言論と行動で今日も平和な学園を引っ掻き回す。果たしてその真意とは……。

彼女に振り回される副会長・千里の視点で描く学園譚。

十人十色。主張も色々。彼女たちの言論に、あなたが感じるものは、反感？ 共感？ それとも……。

第一話 千里の道も一歩から

うららかな春の日差しを受け止めつつ、緑豊かな学院敷地内に一棟の屋舎がそびえ立つ。久しく風雨にさらされてきたことを如実に物語る、鈍くすんだ赤レンガの外壁。一朝一夕では出ない、深い味わいの緑青で覆われた銅板屋根。それらは見る者に、いやがおうにも建物自体の歴史の古さを知らしめる。はたまた、内装においても同様に、意匠の凝った木製設備品の数々などは、年代物特有の光沢を放ち、その使用者に懐古と回顧の念を喚起させる。『用途』として建てられる現代の建物とは一線を画し、過剰なまでに様式美が追求された、古きよき時代のエッセンスを今に伝える建築物。文化財に指定されうる資格を十分に備える風格漂う講堂は、我が校が押しも押されもせぬ伝統校の証である。

しかし、現在その内部は、厳かな佇まいとは相反し、若い熱気と、うわついたざわめきで満ち溢れていた。

明らかに場違いな今の喧騒を目の当たりにしたら、この記念講堂に名前を提供した人物は憤るだろうか、それとも嘆くだろうか。もっとも、その人は、すでに故人となっているのだから、もはや確かめる術はないのだけれども。

ハア……。こんなどうでもいい文言が頭にうかぶってことは、やっぱり現実逃避なんだろうなあ。いくら逃避行動に走っても、直面してる問題からは逃げられないってこと、頭ではわかってるんだけど……。

ボクは今、講堂内のステージに立っている。気もそぞろに顔を上げれば、目の前に広がる十重二十重の聴衆席。そこにひしめく生徒のみんなは、さっきからせわしなく、隣近所とおしゃべりを交わしている。この様子を悪くたとえるなら、まるで街路樹や電線に大拳してやってきた鳥のよう。体は同じ方向を向いてるけれど、視線は思い思いの方向で、何かをさかんにさえずっている。それにどんな

意味があるのやら……。その一語一語にはちゃんと意味があるんだろうけど、数百人がいっぺんにしゃべっていると、本当にガヤガヤっていう雑音にしか聞こえない。これって、いろんな絵の具を混ぜ合わせると、色が失われて黒くなるのと同じ原理？

でも、こうやって俯瞰的に見ていると、それぞれの行動に、なんとなく類似性や法則性みたいなものが感じられるから不思議。これも、あらゆる事象を分類したり、なにかしらの意味を付与して理解したがる人間の性からくるのかな？ あ、今はそんなこと、どうでもいいことか。また、逃避行動に走ってしまった……。

そう、今のボクにはやり終えなきゃいけないことがある。ざわめくみんなを前にして、ボクはただ、機械的に事務的に、手元の原稿を読み上げる。

今日は、私立雅乃園学院高等部の生徒総会。生徒会に籍を置くボクは、不本意ながら、とある事案の経過報告を行っている。

たいていの生徒総会なんて、無関心的な静けさのなか、坦々と議事が進行していくというのが定番のはず。だけど本日この場に限っては違ってた。もしマイクがなかったら、きっとボクの声は、完全にかき消されてるんだろうなあ。でも、結局はあってもなくても同じなんだけど。演台からだとよくわかる。ボクの言葉なんか誰も聞いちゃいないってことが。それもそのはず。みんなが聞きたいのは、こんなまどろっこしい説明じゃなくて、最後の結論部分なんだから。

その問題の部分はもう間近。ボクは一呼吸置き、締め括りとなる一文を読み上げた。

「以上のような経緯から、今後、校内での携帯電話の使用は禁止となります」

この言葉を皮切りに、講堂内では大ブーイングの嵐が巻き起こった。張りのある声帯からほとばしる非難の大合唱は、ある意味、モスキート音も目じゃないくらいの高周波。鼓膜をつんざく大音響に、ボクはクラクラ立ちくらみ。

まあ、この反応は予想通り。いくら古式ゆかしい校風が売りだらって、そこに通う生徒は、まぎれもない高度情報社会の申し子たち。いまだきケータイ禁止なんて規則、受け入れられる可能性なんてほとんどゼロ。

絶対ひんしゆく買うことになるってわかってたけど、いざ直面してみるとやっぱり萎縮してしまう。

うわぁ……。明らかにこっち見て何か叫んでる人がいる。それもうすごい形相で。しかも、ひとりやふたりじゃない。うう……。これは、怖い。ボクは思わず後退った。

急いで原稿をたたむボク。あとは敵意むき出しの視線をシャットアウトして、逃げるように演台を後にした。ボクは悪くない、ボクは悪くない。心の中でそう繰り返しながら。

みんなの罵声を背中に受けて、気分はまさに陰鬱そのもの。もっとも、気分どうこうっていうのなら、この大役を仰せつかって以来、ずっと沈んだままだったけど。

「静かに！ 静かにしてください！」

傍らで、マイクに向かって悪戦苦闘を演じる議長さん。だけど、みんなは完全無視。それでもなお、收拾を図ろうとする議長さんの姿には、本当に頭が下がる。ああ、この人も貧乏くじを押し付けられた被害者なんだ。気苦労お察します。

今さっきの係助詞「この人も」の『も』は強調じゃなくて並列の意味。つまり、貧乏くじを押し付けられた人間はもうひとりいるってこと。そのもうひとりとは、言わずと知れたボクなんだけど……。

どうしよう、この総会が終わったら、きつとみんなから散々文句を言われるに決まってる。今回のことで、全生徒を敵に回したようなものだから。ボクはただ、経過報告をしたただけに……。

あゝあ、こんなことなら生徒会役員になんかなるんじゃないかなかった。面倒ごとの矢面に立たされるのはいつもボク。損な役回りばかり押しつけられて……。今日のことだってそう。そもそも、こういう重大懸案は、生徒会長自ら説明するべきじゃないんですか！

キツと顔を上げ、ボクは生徒会役員席中央の人物を見やる。そこに陣取るは、学内随一の才媛と謳われる、現生徒会長・二条諦華さん。見目麗しく、気品に満ちた趣きは、名のある画家の描いた貴婦人のよう。佳人の誉れ高き二条会長は、涼やかな顔で騒然とする講堂内を眺めている。心なしか笑みさえうかべているその様は、まさに絵になるって形容してもいいくらい。だけど、いくら頭がよくても、いくら美人だとしても、ボクはこの人がキライ。

まったく、諦観してるのかなんなのか。とにかく傍観者気取りも大概にしてほしいよ、人の気も知らないで……。思わずため息が漏れる。

うう、いつもながら気分が重い。ダメダメ、とにかく気持ちを切り替えなきゃ。これじゃまた、胃がシクシク悲鳴をあげちゃう。

気を取り直して背筋を伸ばしたその瞬間、不意の衝撃が背中を襲った。ボン。

胸のほうまで振動が響く。誰かに叩かれたような、何かがぶつかったような衝撃。

（え？ なに？）

訳もわからず直立不動で硬直する。同時に背後でゴトツと音がした。恐る恐る振り向いた先にあったもの。それは無造作に転がる片方だけの靴だった。さっきの衝撃と、どこからともなく現れた靴。そのふたつの連関が、ボクにひとつの可能性を想起させた。

途端に顔が熱くなる。ざわめきに混じる嘲笑が、さらに心を掻き乱す。

（なんで？　なんで、ボクがこんな目に？）

ボクは知らず知らず持っていた原稿を強く握り締めていた。答えの出ない自問自答を繰り返し、やり場のない情念は迷走する。やがてその感情は、手近な憎悪対象を見つけて邁進していった。

（この人のせいだ！　全部この人が悪いんだ！）

ボクは二条会長を睨みつける。

（会長がボクにこんな仕事を押し付けたから！　会長がボクを役員

に任命したから！ あれもこれも、全部会長が悪いんだ！

激しくなる動悸にあわせて、ドンドン不満が噴出する。

（もう限界！ やめてやる！ ゼッタイやめてやる！！）

怒りに任せての決断。ボクの思考は、どれだけ批判的かつ強烈に辞意を叩きつけるかというシミュレートへとシフトする。ただ辞めるだけじゃ不十分、会長に非があるってこと、必ず認めさせてやる！ 最初に槍玉にあげるのはあれ！ 次にあのことと、それからあのことも！

中空を睨み、あれこれ考えをめぐらすなか、視界の端で何かが動いた。ボクは反射的にそっちを見る。焦点の合った先にいた人物。それは今の仮想敵、二条会長その人だった。彼女は自分の席を後にすると、ボクのいるステージ中央付近へと歩み始めた。

（何のつもり？）

目がわたたと会長を追いかける。

二条会長は自信に満ちた足取りで、一步また一步と近づいてくる。緑の黒髪をなびかせ颯爽と歩く姿は、まるでモデルさながら。これまであまたの異性・同性を魅了してきただけあって、立ち居振る舞いも伊達じゃない。だけど、同じ所作だとしても、相手に抱く感情ひとつで印象自体は真逆になるもの。今のボクにとっては、その動作ひとつひとつが忌々しくて憎々しい。とてもじゃないけど、のどやかに迎え入れるなんてできっこない。それでもかっというくらい、牽制と威嚇の視線を投げつける。それでも歩みは止まらない。結局、彼女が足を止めたのは、ボクのパーソナル・スペースに一步踏み込んだラインだった。否応無く不快感が跳ね上がる。

慰めにでも来たの？ ふざけないで！ 取り繕ったいたわりの言葉なんて、言ってるほうは気持ちいいかもしれないけど、言われるほうは自分が惨めな立場にあるってことを自覚させられるだけ。そんな言葉を吐こうものならゼッタイ許さない。どうせやめるんだ。今までのうつぶん、全部この場でぶちまけてやる！

ボクは精一杯の険しい表情で相對した。言いたいことは山ほどあ

る。あとは戦端が開かれるのを待つばかり。ジツと会長の顔を凝視する。相手がどんな意味合いの言葉を発するかは、表情を見ればだいたい予想がつくものだから。

だけど、会長の顔に、ボクの想定した表情は、ひとかけらもなかった。あの偽善者特有の『心痛な面持ちを装ってはいますが所詮は他人事』っていう薄気味悪い哀れみの表情は。無言でただ真っ直ぐこつちを見つめるだけ……。待てど暮らせど彼女の口からは何の言葉も発せられない。

当てが外れて困惑するボク。困惑は次第に動揺へと変わり、ボクの意識が目の前にいる会長という存在にじわじわ侵食されていく。そうだ、そうなんだ。ボクの知ってる会長は、確かに変な人だけど、本当に困った人だけど、善意だろうと悪意だろうと自分の本心は包み隠さず伝える人。うわべで人と接する人じゃない。形式的な慰めの言葉なんて言うはずない。

ボクの都合が反映された虚像としての会長は崩壊し、実際の、生の会長へと塗り換わる。

それを待っていたかのように、二条会長は口を開いた。

「大丈夫？ 千里」

押し付けがましい善意も何も含まれていない、ただの問い掛け。なぜかその一言に目頭が熱くなる。

「……はい」

ボクはそれだけ答えて目を伏せた。

どうして？ いつもあんなに不満を感じている相手なのに……。ボクは必死で考えた。意識と反応とのズレに折り合いをつけるためでも、いくら考えても戸惑いが増えるだけ。答えはやっぱり出ない。うなだれ呆然とするボクを現実に取り戻したのは、視界に映る会長の足の動きだった。

再び歩き始めた会長が、すれ違いざまにボクの肩へと手を添える。ふたりの距離が開くにもない、その手は緩やかに離れていった。撫でるような感触と、ほのかな会長の香りを後に残して。ボクはそ

これらの感覚を追い求めるように振り返った。

ボクがその後ろ姿を捉えたとき、二条会長はすでに演台まで到達していた。彼女はマイクスタンドからマイクを取り外すと、スタスタとステージ袖へと向かって行った。てっきり何かしゃべるのかと思っただけ……。ボクは会長の進行方向へと目を向ける。あつちには備え付けの大型スピーカーがあるだけなのに……。って、スピーカー！？

さっきまでの憂愁モードがあつという間に吹き飛ばされる。まさか、まさかと思うけど。マイクとスピーカーと二条会長、この三者が揃うことによって引き起こされることといえば、ボクの頭に浮かぶ回答はひとつだけ。それを導き出したのは、マイクを使う立場になったからこそ知りえた知識。そんな立場、ホントは今でも嫌だけど、今回だけは感謝します。ボクはとっさに目を閉じ、耳を塞いだ。直後。

キーン！

わずかに伝わる不快な音。

やっぱり！ 故意にハウリングを起こすなんて、会長、無茶苦茶すぎですよ！

こんなの突然お見舞いされたら、とてもじゃないけど耐えられない。きつとみんな、今頃は……。あ、そうか。別に目は閉じる必要はないんだ……。

パツと目を開け見た光景、それは苦悶に顔を歪め、さっきのボク同様、耳を塞いで目をギツチリ閉じているみんなの姿だった。やばりそうなるんだよねえ、脊髄反射って言っただけ？

いやいや、今はそんな悠長に感心してる場合じゃないよ。ボクは急いでこの惨事を引き起こした張本人へと視線を向ける。当の会長は、なにくわぬ顔で演台へと引き返してる最中。本当に、あなたって人は……。これはれっきとした問題行動ですよ。まあ、それはいつものことだけど……。もう、あきれてため息しか出ない。

ハウリング音が止んだのを受けて、みんなの混乱も収まってい

ただ、さっきまでとは違うのは、講堂内が完全な静寂に包まれてる
ってこと。

演台に立った会長が、生徒のみんなに、おもむろに語りだす。

「やっと静かになったわね。あなたたちの不満はわからなくもない
けれど、闇雲に騒ぎ立てても何の解決にもならないわよ」

マイク片手に話しながら、くいくいとボクに手招きする。

意図はまったくわからないけど、とりあえず応じてみる。会長の
傍まで行くと、ボクはくるりと反転させられた。

「可哀想に、本当に心が痛むわ。どうしてこんな酷いことをするの
かしら？ 思い通りにならないから、かんしゃく起こして八つ当た
り？ それじゃ、まるで幼児と同じね」

いけしゃあしゃあと弁じながら、時間をかけて、ゆっくりと、会
長はボクの背中を手で払っていく。まるでみんなに見せつけるよう
に。

この行動で、ボクははつきり理解した。わざわざこんなことをす
る理由を。

ボクに隣で控えるよう合図した会長は、正面に向き直り聴衆席を
一瞥する。

「誰なの？ こんなことをしたのは」

そう。一連の行動はすべてこの一言に係っている。靴を投げつけ
るという行為が悪行だと、はつきり認識させるため。案の定、さっ
きの抗議・非難で生まれたであろう連帯感は見事に断ち切れ、み
んなの顔が一斉に投擲元のポイントを指し示す。そりゃ、自分の近
くから靴が飛んでいけば、誰だって気付くよね。

もう犯人特定は時間の問題。ですが会長、こんな公衆の面前であ
ぶりだすっていうのもどうかと。それに、一応被害者であるボクと
しては、犯人が誰かわかってしまったら、その人とどう接すればい
いかでちよつと困るし。知りたいような知りたくないような、そん
な複雑な思いが入り混じる。

でも、この人のことだから、きつと……。

「ま、ここで犯人を晒し者にしても意味はないわ。これ以上の追求はやめておきましょう」

半ば成り行きを予想していただけに、一瞬ボクは耳を疑った。

完全に嘘！ 信賞必罰を旨とする会長が、こんなうやむやにことを終わらせるなんてありえない！

だけど、ある一点を見据える会長の横顔を見てボクは納得した。そういうことですか。犯人の人、ご愁傷様……。

床に転がる靴を見つめながら会長はさらに続ける。

「それにしても、こんなこととして何になるの？ これでも抗議のつもり？ 本当にバカバカしい。あのねえ、有形力を行使されたら、誰でも心を硬化させるに決まっているでしょう？ それで事が丸く収まるなんてこと、あるわけないじゃない。人に翻意を促すなら、もつと建設的な手段があるでしょうに」

視線を戻した会長が聴衆席全体を見回す。

「あなたたちもそうよ。さっきの大騒ぎは一体なあに？ あれじゃ、ただの罵詈雑言。とても異議異論なんて呼べる代物ではないわ。あんなことで何かが変わるなんて期待するだけ無駄。もつと考えて行動したら？ いい？ 胸に手を当てて思い起こしてみなさい。家庭で、学校で、テレビで、ネットで、『一億総評論家』なんて言葉があるらしいけど、実際、身の回りで批判めいたことを耳にするのは日常茶飯事。でも、現実問題として、それらの批判・提言が社会問題の解決に直結して何かが改善されたって実感したことある？ ないでしょ。まあ、それらの大半は愚にも付かない妄言だってこともあるけれど、多くの批判・提言なんてものは、その後の過程が完全に途切れてしまっているのだもの。発せられた言葉に基づいて行動する人間なんてほとんど皆無。発言をした当の本人でさえもね。大抵の場合が言いつ放しの尻切れトンボ。それじゃあ、何も解決するはずないわよねえ。それでも仲間内でなら、単なる愚痴として聞き流してもらえから許容範囲でしょう。でも、公の場でそれをやってしまったら、『口先だけのペテン師』とか、『実行力のない能

無し』なんて、そしりを受けるわよ。それともあれ？ 文句を言えば、誰かが同調して自分の代わりに行動を起こしてくれるとも思っているのかしら？ だとしたら、どうしようもない他力本願体質ね。ただわめくだけで、後はすべて人任せ。そう、まるで赤ちゃんは自分では何もできないから、泣くことで親に面倒をみてもらうでしょう？ でもね、それは親と子という関係性があるから成立するものの。赤の他人が交差する社会において、誰が好き好んでそんなお節介焼くものですか。わかるでしょう？ あなたたちが他人の不平不満に対して関心が無いように、他人もあなたたちの不平不満なんて興味ないんですもの。偉い人も言ってるでしょう？ 『人を動かしたいなら憶測で語るな、結果で示せ』ってね。そもそも、最低限の思考力があるなら気付いて当然なのよ。ご自慢の理論が物議をかもし出せないでいるってことは、世間から必要とされてないってことだってね。どちらにしろ、まっとうな社会生活を送っている大人はね、そういう思慮の足りない人間が垂れ流す妄言に付き合うほど暇じゃないのよ。ま、それでも、自分の考えが真つ当だと疑わないのなら、私は別に止めはしないわよ。好奇とあざけりの目に晒されながら、無様にわめき続ければいいわ。いつまでも大人になれない、とこしえの赤ちゃんたち」

会長の顔にうかぶ蔑みの表情。張り詰める講堂内の空気。自然と厳しい視線が会長に集中する。あれだけキツイこと言ったんだから、この場の雰囲気は当然かも。

でも、裏を返せば、それだけ会長の話が聞かれてるってことの証明。そりゃ、悪口を言われて知らん顔できる人なんて、そうそういるもんじゃないしね。そう。これも、会長お得意の導入術のひとつ。みんな完全に乗せられちゃった。ってことは、やっぱり今日も始まるんですね……。

会長がマイクスタンドにマイクをセットしたのを合図に、講堂内の照明がフツと落ちる。代わってパツと点灯するスポットライト。まばゆい光が、まがまがしく、もとい、神々しく会長を照らし出す。

まったく、いつの間に舞台装置まで掌握したのやら。後で問題にならなければいいけど……。何はともあれ準備万端整って、会長は開口一番、咆哮する。

「聞け！ 我が同胞、我が学友たちよ！ 私は今、諸君に苦言を呈した。それに対し君達は何を感じ、何を思ったか？ 何も思うところなく、ただ反感のみを感じた者は去れ！ 人の意見に耳を貸せぬ者の器量など、たかが知れている。そのような者が、ここで何を学べるというのか。曰く、欠点を指摘されても改善できぬ者は白痴である。事実を突きつけられて憤りを感じる者は偏狭である。言及された誤りに対し開き直る者は愚劣である。果たして諸君は、それら愚者と同じであるのか？ いや、私は決してそうとは思わない。そして私は信じる。諸君が私の言葉に耳を傾けてくれることを。なぜなら、私は諸君らによって選ばれた存在なのだから！」

いつもながらの名調子。今日は独裁者バーションですか？ 語り口もさることながら、白魚のような手が縦横無尽に宙を舞う。その繊細な動きは、どことなく舞踊を連想させ、思わず視線が誘導される。こういう風に、少し大袈裟とも思えるくらい身振り手振りを多用するのが会長のスタイル。これは彼女の持論『真摯に語りかければ必ず聞いてもらえるなんて絵空事。もし大衆に話を聞かせたいなら、カリスマ性は必要不可欠。だからこそ、演説者はパフォーマーでなくてはならない』ってことの実践らしい。事実、会長の演説は人を惹きつける。それは説得力どうこうってことよりも、さっき言ったパフォーマンス性と、絶妙な間の取り方に代表される話術による効能って言うていいと思う。そして、忘れちゃいけないのが二条演説の最大の売りであるその声。ただ『いい声』ってだけじゃなくて、聞いてて心地いいって言うかなんと言うか……。ウソかホントかわからないけど、なんでも会長は『1/f ゆらぎ』の声の持ち主だとか。そのせいなのか、人によっては恍惚感すら覚えるって言うほどだからスゴイ。

それらの要素が相乗効果を生み出して、今も会長の話に引き込ま

れつつある生徒の数は急増中。これで今日も大多数の賛同を得て無事終了かな？ でも今の話って要するに、『私はおまえたちの選んだ代表者なんだから、黙って言うことを聞け』ってことですよ。ホント独裁的。

だけど考えてみると、会長の言うことにも一理くらいはあるかも。政治の世界では任命責任がどうこうって言われることがあるけど、本を正せば、それよりもっと根本的な選出責任てものが代表者を選んだ側にあるはずで。なぜか誰も言わないけど……。それに、民主主義だと選挙結果は構成員の総意になるわけだから、自分が投票したんじゃないからって理由で、責任を回避したり、統治機関の決定に従わないでいいなんてこと認められることじゃない。もしそれが嫌だって言うのなら、別な体制を採るところに移ればいいだけの話。今の時代、移住なんてそんなに難しいことじゃないし、そもそも、ずっとここに居てくださいなんてお願いされてるわけでもないんだし。だから、ここに居続けるってことは、この体制に従いますってこととの意思表示と同じ。だったら、きちんとルールに従わなくっちゃダメだよ。それでもやっぱり不満があるって言うのなら、ちゃんと適正な手段に則って活動しなきゃだよ。靴を投げられた被害者だから言うわけじゃないけど、やっぱり変な手段に訴えられるのは困ってしまう。勝手に盛り上がって過激な行動をとられると、周りが迷惑するだけだから。言論の自由とかは保障されてるんだから、ちゃんと議論すればいいのに。ま、今の会長だったら『大多数を形成できないような弱論なら、黙して語るな！』とか平気で言いそうだけど……。あ、でも、結局みんな『社会正義の実現』とか、お題目を傘に着て、自分の都合を押し付けようとするだけだから、議論に決着なんかつくわけないか……。そう考えると、やっぱり必要とされてくるのは、求心力のあるリーダーってことなのかなあ。うーん、と唸り声を上げながら、ボクは演台で熱弁をふるう二条会長へと視線を移す。

「されど、私は神ではない。全能でないだけに、当然、誤りも犯す。

そのことにより諸君と間に齟齬をきたすこともありうるであろう。その事態に対し、諸君のどのような態度をとるのだろうか？ 先ほどのように不満を口にするだけでは何も解決しないのは周知の事実である。ただぐずって騒ぎ立てるのは幼児のすること。そのような稚気の所業など、黙殺されるのは至極当然である。正常な分別を持ち合わせているならば、真に事に当たる気構えがあるのならば、自ら行動を起こすものである。田畑も耕すことをしなければ収穫をもたらさない。行動を起こさずして何かを得ようとするなど、無思慮の極致。『守株』の故事は、それらただ与えられることのみを望む愚か者たちへの戒めである。有史以来、多くの人々が欲して止まない富や栄誉、それらは与えられるのではなく、獲得するものである。知識や技術も何らかの超越的な存在から与えられたものではなく、すべて先人たちの努力により獲得してきたものである。加えて我々誰もが生まれながらにして有しているとされている権利でさえも、それは幾多の闘争を経て獲得したものである。勝利の女神は自らの意思を体現する者に微笑みかける。金銭・物資は無尽蔵に湧き出るものではなく、世の中を循環しているものである以上、与えられることだけを望み、自らが何も行動しなければ、逆に奪われる側となることは必定。それが嫌なら行動せよ！ 何かを欲するならば自ら動け！ この一言こそ、今の世を生き抜く指標たりえるであろう。今回の件も、諸君が率先して行動を起こすならば、私は再度、学校側と折衝を持つことを約束する。立てよ、乙女！ 己の権利を守るために。乙女たちよ、立て！ 己の理想を実現するために。立つて己が意志を世に知らしめよ！ その大事が成った暁、私は、真の意味で、諸君の意思代行者となるであろう！」

二条会長が両手を高らかに掲げたのに合わせて巻き起こる大歓声。今にも『ジーク！』とか『ハイル！』とか聞こえてきそうなくらいの熱狂振り。まったく、この会長にしてこの生徒あり。ホントみんなノリがいいんだから……。

それにしても、こんな結果で終わるんだったら、今日のボクの災

難て一体なんだったの？ 正直、噛ませ犬もいいところ。完全に骨
折り損のくたびれ儲け。

「ハア……。もう、帰りたい……」

ボクは今日、何回目かのため息をついた。

第二話 石のように固い意思で

うららかな午後の陽気に誘われて、ボクの体がこくりこくりと揺れ動く。とめどなく続く混濁と覚醒のループ。それはもう何回ぐらい繰り返されたんだろう……。周期的に訪れる覚醒期のたびに、ボクはわずかばかりの意識レベルで、今どこにいるのかを認識する。今は放課後……。ここは生徒会室……。

夢心地のなか、カタカタというキータッチの音が耳を刺激する。その単調なリズムは、このどうしよもない眠気を妨げるどころか、かえってそれを助長する。ああ、また目を開けてるのが辛くなってきた。今度もこの甘美な誘いに抗うのはムリっぽい。次、目を覚ますのは何秒後？ それとも何分後かな……。

「千里。悪いけど、お茶、もらえる？」

不意に飛び込んできた聞き慣れた響き。

「は、はいっ！」

鶴ならぬ会長の一声で、ボクの睡魔は跡形も無く霧散する。勢いよく立ち上がったのに合わせて、椅子がガタツと派手な音をたてた。訝しげな顔でこちらを見る会長。だけど、彼女はすぐさま顔をほころばせ、口角の上があった口元をチョンチョンと指し示した。

今度はボクが怪訝の表情をつくる番。一体なに？ ご飯時じゃあるまいし、食べこぼしってわけでも……。

おずおず伸ばした指先に湿り気！ とつさにボクは、ハンカチを取り出し、口元を押さえた。

（うわぁ……。うたた寝して、よだれだなんて）

『穴があつたら入りたい』って、まさにこのこと。恥ずかしさに頬を染めながら、ボクは会長の様子をチラリとうかがった。

「お茶、眠気覚ましに濃いめをお願いね」

笑みをたたえながら、手元の資料に目を落とす会長。うう……。笑われた。しかも、ご丁寧に皮肉の追い討ち付き。

「はい」

バツの悪さを隠すため、不満顔で生返事。無駄な足掻きと知りつつも。

ボクはトボトボ部屋の片隅にある給湯場へと歩き出す。これじゃ、副会長の面目丸つぶれ。もったも、面目なんてあればの話なんだけど……。

生徒会副会長！……と、言えば聞こえはいいけど、あらゆる実務をそつなく、ボクから見れば完璧にこなす現会長の下では、補佐役なんて無用の長物。ボクに与えられる役割といえば、今みたいなお茶汲みと、報道官まがいの広報活動がその大半。この前の経過報告もその一環だったりする。

それだけ聞くと、結構楽な仕事ように思えるかもしれないけど、実際は違う。はつきり言うと、仕事どうこうよりも、精神的負担のほうが大きい。今まで何度、涙で枕を濡らしたことか……。世の中で一番恐ろしいのは、結局人間だって言われるけど、ホントその通り。今の役職についてから、ボクはそのことを身をもって実感させられた。それはもう、嫌って言うほどに。ボクがそんな数々の辛酸をなめるに至った元凶は、もちろんこの部屋の主、二条会長その人。卓抜したルックスと、ちょっと過激な弁舌。それらを武器に、生徒会活動に無関心な一般生徒を巧みに取り込み、ウケるが勝ちという風潮のある選挙戦を圧倒的な支持を集めて制した二条会長。彼女はすぐに、歴代生徒会が放置してきた諸問題にメスを入れ、大胆な改革を断行した。

この概略だけなら、一見辣腕生徒会長のようにも思えるけど、実際はどうなんだろう？　ボクが疑問符をつける理由。それは彼女が手をつける改革が、どういうわけか痛みをとまなうものばかりだから。それかなり恣意的な手法を採ることが多い。当然そうなると、改革推進をこころよく思わない人も出てくるわけで。不満分子が集まって、校内にはアンチ二条派が暗躍してるっていう噂もちらほら。その改革関連で、関係部署との調整を行うのもボクの役割。でも、

結局は会長が独断で決めちゃうから、ただの事後説明になつてしま
うのが現状だったりするんだけど。そういう事情があるから、ボク
がひよこひよこ出向いて行つても、「はい、そうですか。わかりま
した」なんてことあるわけもなく。大抵は吊るし上げを食らつて、
散々厭味を言われた挙句、やつと開放されるっていうのが定番。こ
の前なんか、簀巻きにされて、床の上に転がされて……。あれは本
当に生きた心地がしなかった。しばらくトラウマで、布団に包ま
つて寝られなくなつたくらい……。

そもそもみんなズルいんだよ。会長本人には、面と向かつて何も
言わないくせに。まあ、会長は公約を忠実に実行してるだけだから、
そんなことしたら選んだ自分たちの良識が疑われることになるつて
ことはわかるけど。でも、代わりにボクを標的にして言いたい放題、
暴言の限りを尽くすなんてヒドすぎる。いくらボクが会長から任命
された立場だから……。

それに会長も会長なんだから。ボクが惨い仕打ちに遭つていろこ
とを知りながら、完全に見て見ぬフリ。ホント何もかもわざとや
つてるとしか思えない。

会長の横顔をねめつけながら、ボクは淹れたお茶を机の上にそつ
と置く。

「どうぞ」

「ありがとう」

湯飲み茶碗に手を伸ばした会長は、お茶を少し口に含み、またそ
れを茶托の上に戻す。その満足気な表情を確認して、ボクはお盆を
抱えて歩き出す。会長の好みの温度はちゃんと心得てるんだから、
文句なんてゼツタイ言わせない。勝ち誇つて取つて返すボク。その
前に、すつとティーカップ差し出された。

「千里。私にもおかわりね」

ティーカップの出所は、今の今までパソコンでの作業に勤しんで
いた会計の藤原紫さん。仕事が一段落して小休止つてところかな？
画面とにらめっこで疲れたのか、ゆかりさんは物憂げに、前に掛

かった縦ロールの髪を後ろに掻き流す。校則でブリーチ・カラーリングが禁止されてることもあって、そのライトブラウンの髪色は、彼女のはつきりくつきりした目鼻立ちとともに、多くの生徒の羨望の的。これもクォーターの特権てやつ？ でも、それはそれでまた、別のところで色々な気苦労があるんだろうけど。何事も功罪半々、光と影。だけど、つまらない思考の持ち主ほど、その『功』と『光』の部分だけを見て羨んだり、ときには妬んでとんちんかんな批判とかするものだしねえ……。ま、ボクがこんなこと思ってみてもしょうがないか。トウヘンボクは治らないって言っらしいし。

「はい、はい。ただいま」

ソーサーごとカップを受け取って、お盆にのせる。

「『はい』は一回」

ゆかりさんがボクを一瞥。

「はい」

「返事は短く、はつきりと」

すかさず飛んでくるお小言。まるで口うるさいお姑さんみたい。

ゆかりさんは、仕事のできる人にありがちな、自分にも他人にも厳しいってタイプ。現実的かつ堅実的思考の持ち主ってことで、会計っていう重要な役割を担ってる。性格的には責任感が強く、それでいて、わりかし思ったことをズバツと口にする人。だから、結構彼女を煙たがる人は多いって聞く。でも、自分のことを棚に上げて、何かにつけ人を非難するってことはしないから、恨まれたり、軽蔑されたりとかはされてないみたい。だけど、彼女の前で他人を批判するのはご法度。口にしたことの倍返し of 勢いで悪態をつかれることになるから。

『批判の意義が改善にあるのなら、当事者に届かなくちゃ意味なんて無いでしょ？』なのに、当の本人に直接言わないで、わざわざ公言して他人に言いふらすようなマネをする。そんなの批判じゃないって、ただの誹謗中傷、陰口よ。私は、そういうバカなことをする連中に、同じように誹謗中傷される気持ちがあるのか味あわせて

あげるの。徹底的にね」っていうのは彼女の言。おかげでゆかりさんは陰で『毒舌裁き人』として恐れられているって話。なんでも毒っ気だけなら会長以上だとか……。

まあ、ゆかりさん自体は、多少……、うーん、かなりクセはあるけど、親しみやすい人には違いainだけど。だからボクも、こういうおふざけ的なお小言には勇猛果敢に反撃する。

「それってどうなんですかあ？ 頼み事をしている相手に、わざわざ気分の悪くなるようなこと言うのって？ そんなの良くないと思います」

「口答えなんて生意気いゝ。せつかく人がメイドの心構えを仕込んであげようっていうのに」

こつちを向いてニンマリするゆかりさん。やっぱりおふざけだったんだ。

「そんなの仕込まれたくありません。だいたいこれって、ボク本来の仕事じゃないんですからねっ」

電気ポットの設定を、紅茶の適温に直しながらの抗戦。

「いいじゃない、別に。どうせ千里はこのなかで一番の暇人なんだから。違う？」

「それは、確かに、そう、ですけど……」

痛いところを真っ先に突かれて、あっという間に意気消沈。なんにもそんな露骨に核心に触れなくても……。

「千里は生真面目ねえ。ゆかりの冗談を真に受けるなんて。そもそも、私がこの仕事をお願いしているのは、あなたが一番お茶を淹れるのが上手だからよ。適材適所。それ以外のなにものでもないわ。事実、私は千里の淹れてくれるお茶、好きよ」

会長が甘い言葉と笑顔を投げかけてくる。こうやって如才なくフオローを入れてくるあたりが、無類の人たらしと言われる一因なのかも。でも、それがあから、ボクなんかは、かえって言葉の裏を勘繰ってしまうっていうのが正直な心情。

「そんな見え透いた甘言に乗せられるほどボクは単純じゃありません

ん。もつとも、褒めたつて何も出ませんけどねっ」

「あら、何も無しの？ 残念。ちよつとは期待してたのに」

いかにもつて感じてため息をつく会長。ボクは、そのわざとらしいガツカリ顔を苦々しく見つめ返す。まったく、この人の真意はどこにあるのやら……。

「バカなこと言わないでください。そもそも何を期待するつて言うんですか？ ホントにもう」

「もちろん、千里のお仕事はご奉仕が本分なんだから、あぐんなことや、こゝんなことに決まってるでしょう？ ですよ、諦華様」
「そうねえ。それも悪くないわねえ」

意味深な笑顔を交わす二人。

力チャン。ボクの手からティースプーンが滑り落ちた。

「な、なに考えてるんですか！ 不潔です！ 破廉恥です！ 警察呼びますよ！」

「あらあら、そんなに取り乱してどうしたの？ 私もゆかりも、具体的な事柄なんて一言も口にしてないのに。想像力豊かな千里は、一体何を思い描いたのかしら？」

「あんなに顔を真っ赤にしてるつてことは、きつと口では言えないようなことなんですよ。ホント、いやらしい子お〜」

底意地悪い光をたたえた四つの瞳がボクを見据える。

「うう……、変なこと言わないでください！ そんなこと、あるわけないじゃないですか！」

「だったら、きちんと説明してみなさいよ。ちゃんと自分の口で、ね」

「それは、その……」

「どうしたの？ 言えないの？」

ゆかりさんの不敵な眼差しに、悪寒と一緒に直感が走る。

ダメ！ このままじゃ、いいように弄ばれるだけ！

ボクはその挑発的な笑みに向かって言い放った。

「言いません！ 言う必要なんてありませんから！」

「抗弁無しにダンマリなんて認めたも同然よ？　それでもいいの？」
「もう、勝手にしてください！」

つまらなそうに顔をしかめるゆかりさん。そんなこと知ったことじゃないとばかりに、ボクは無言で淹茶に専念する。

「ほらほら、千里。そんなに怒らないの。私もゆかりも、ちょっと息抜きにからかってみたただけなんだから」

すました微笑をうかべる会長。その『軽い気持ちでしたことだから許されるでしょう』って態度が、委細一切気に食わない。

「そんなのわかってます！　わかっていても、不愉快なものは不愉快なんです！」

「それは道理ね。結局、理解なんてものは、内から沸き起こる感情の前では無益ですものね」

分別顔でうなずく会長。

「何の話ですか？」と言いかけて、あわてて口をつぐむボク。下手に首を突っ込んで、さっきの二の舞なんてもうこりこり。ここは無難にノータッチ。これできつとこの部屋にも、それよりなによりボクの波立つ精神にも、再び静寂が訪れるはず。

そんな儚い希望を抱いた矢先。バン！　というけたたましい音とともに、生徒会室の重厚な扉が開け放たれた。

「大変！　大変！　大変！」

慌ただしく飛び込んできた一人の女の子。その子はボクの従姉妹で書記の大江和泉ちゃん。トレードマークのツインテールをなびかせて、会長席へと一目散に駆けて行く。

「タイヘン、タイヘンタイヘンタイヘンタイヘンタイ、ヘンタイ？　あれ？」

小首を傾げるいずみちゃん。そのアナグラムみたいに変化してしまった言葉に反応して、会長とゆかりさんがボクをジトツと見つめてくる。

「いい加減、その話題引つ張るのやめてください！」

ボクの抗議に、悪戯っぽい笑みで返し、会長がいずみちゃんに向

き直る。

「どうしたの？ いずみ。そんなに慌てて。さあほら、軽く深呼吸して」

いずみちゃんは言われた通り深く息を吸い込むと、そのまま鼻をクンクン鳴らしだし、キョロキョロ周りを見渡した。

「あー！ みんなしてずーい！ 千里ちゃん。あたしにもココア、ココア！」

そうか、この紅茶の香りと会長の湯飲み茶碗に気付いたんだ。仕方なく、いずみちゃん愛用、デフォルメされたクマがプリントされたマグカップを用意する。

「もう、いずみちゃんまで……。ボクの本当の仕事、何かわかってる？」

「え？ 茶坊主？」

少しも悪びれたところが無い素っ頓狂な答えに、ボクは思わず絶句する。

「あら、茶坊主って結構重要な役割だったらしいわよ」
しれっと口を挟む二条会長。

「そんなフォローいりませんから！ そもそもボクは、好きでお茶酌みなんかしてるわけじゃないんですからね！」

「ホントにそう？ その割には随分な熱の入れようじゃない？」

ゆかりさんが、目線で給湯場の一角にある嗜好品棚を指し示す。

そこは唯一ボクの意味が尊重される場所。いわばボクだけの絶対不可侵の領域。

「お茶だけでも、種類はもとより産地に等級、果てはブランドまで至れり尽くせり、よりどりみどりですものねえ」

「それでホントは嫌だって言われてもね」

含み笑いの会長とゆかりさん。ボクはただただ沈黙する。

「イヤよイヤよ好きのうちー！」

陽気な声でとんでもないダメ押し！

「いずみちゃん！ そんな言葉どこで！」

思わず声に出しちゃったけど、情報源はわかりきってる。

いずみちゃんのお父さん、つまり、ボクにとつての叔父さんは、なぜかとっても懐古趣味。だから、普段の会話でも、古い言い回しや死語なんかを連発する。『俺』とか『私』とか、親の使う一人称代名詞が高確率で子供に継承されるように、いずみちゃんもお父さんの影響を受けまくってる。反面、日常的にいるんな言葉に触れるせいか、彼女の国語力はたいしたもの。そこを買われて書記に抜擢されたってわけ。でも時々、変なタイミングで変な言葉を口走るのがたまにきず。いずみちゃん自身、そういった言葉の意味を、ちゃんとわかって言っているかつてことは、ちよつと疑問だけど……。今さっきのがまさにそれ。おかげでボクは、反論の機会を完全に失っちゃった。

会長もゆかりさんも、ころころ笑ってるし……。なんなのそれ。本当はいずみちゃんの物言いが可笑しくて笑ってるだけかもしれないけど、話の流れからしてボクが笑い者にされてるとしか思えない。いつも同じじゃ味気ないと思って、せつかく人がいろいろ調達してきたっていうのに。ホント、サービスし甲斐のない人たち！

「それならいいです。ボクはもう、喫茶関係のことは一切やりませんからね。今度からは全部セルフサービスでお願いします！」

「ええ。じゃあ、じゃあ、これから千里ちゃん、ここでなにをするの？ 有閑マダム？」

「そんなわけないでしょ！ まがりなりにもボクは副会長なんだから、ボク本来の仕事をするだけ！」

「それは頼もしい限りねえ。ところで、千里。あなた本来の仕事ってなあに？」

「なにつて、そんなの決まってるじゃないですか！ ボク本来の仕事は！ 仕事は……。仕事は？」

どうしよう……。大見得切ったはいいいけれど、次の言葉が出てこない。口がパクパク空回り。間髪入れず、ゆかりさんといずみちゃんが言葉をつむぐ。まるでアテレコみたいに。

「スケープゴート」

「人身御供？」

ヒドい！ ヒドすぎる。あながち間違いじゃないからなおさら。もう、心が折れそう……。

「ふたりとも、それは言い過ぎ。安心して、千里。私はそんなこと、微塵も思っていないから」

どの口が言うんだか！ ボクに生け贄まがいのことをさせてる張本人のくせに！ ボクの萎えた心に火が灯る。ジッと睨んで無言の抗議。対する会長は、なぜかうれしそうに目を細め、言葉を続けた。「閑話休題。それじゃあ、いずみ。そろそろ何が大変なのか、聞かせてちょうだい」

「そうだった！ これです、これこれ。とにかくタイヘンなんです！」

いずみちゃんを取り出したのは、表面に文字がビッシリ印刷された一枚の紙。構成からすると新聞ばい。でも、普通の新聞と規格が違うっていうことは……。

「あー、いずみちゃん。それ新聞部が発行してる学内新聞でしょ。

ダメだよ、掲示物を勝手にはがしてきちゃ」

「違うよ！ あたし、そんなことしないって！ これ、ときどき配られてるほうの新聞だって！」

いずみちゃんが、腕をブンブン回してモーレッツ抗議。そんなことしたら、新聞がくしゃくしゃになって読めなくなっちゃうよ。

「ああ、あのゴシップが大半を占める低俗なほう？」

落ち着き払っているけど、あからさまに嫌な顔。ゆかりさん、そういうの嫌いだから。件のそれは同じ新聞部が版元の、通称『裏新聞』と呼ばれる不定期新聞。ゆかりさんの言葉通り、載っている記事は、あんまり褒められた内容じゃないのは確か。だから、正規の学内新聞とは違って、ゲリラ的に刊行、配布されてるってわけ。でも、発行部数の違いから、どっちの新聞のほうがウケがいいかは一目瞭然。醜聞怪聞がもてはやされるのは、いつの時代でも、どん

な社会でも同じってことかな？

「それで、その新聞がどうしたの？」

いずみちゃんをなだめながら、ボクは紙面に目を凝らす。会長の演説写真が載ってるってことは、この前の生徒総会関連のことみたい。え〜と、見出しには何て？

「『リアル・ギオン！？ 今チャウシエスク！？ 二条会長、またも狂権発動』 なによこれ！」

読み上げたのはゆかりさん。その声がヒステリックに裏返る。

「ゆかり。そんなに声を荒げるものではないわ」

制する会長の声音は、あくまで穏やか。

「すみません……」

たしなめられてしゅんとするゆかりさん。猫かぶりってわけじゃないけど、ゆかりさんは会長の前でだけ、時々しおらしい一面をのぞかせる。なにがそうさせるのかは、ボクにはちっともわからないけど。

「ですがこれはあんまりです。諦華様がどれだけ尽力したかも知らないで……」

悔しさを滲ませるゆかりさん。そのことに関しては、ボクも同意するところ。

事の発端は二ヶ月前。ある生徒が授業中にケータイをいじってるのが発覚。先生が厳重注意のうえ、一時没収しようとした際、その生徒は何を思ったか、逆ギレして権利だなんだかんだと喚きたてたからさあ大変。おかげで学校側の重鎮・お歴々はたいそうお冠。『最低限度の義務を果たせない者が権利を主張するとは何事か』って。それで、校則の上位規則で、学校側が一方的に定めている校令に、ケータイ持ち込み禁止って条文を盛り込もうって動きが出る始末。

そこに待ったをかけたのが二条会長。度重なる交渉の末、なんとか今後の改正が可能である校則で、使用禁止にするって譲歩案を取り付けたって次第。

会長は学校側との協議に、一切ボクたちを関わらせなかったから、

結構大変だったと思う、説得材料集めとか。だから、手伝いたくて歯がゆい思いをしたゆかりさんが怒るのは当たり前。でも、会長自身はいたって平然。

「過程どうこうなんて問題にもならないわ。結果を出すつもりなら力を尽くすのは当然のことですもの。まあ、この件に関しては、そういう意見もあるということで、軽く受け流しましょう」

そう言つて会長は、手振りで新聞を要求する。こう言われるともう、ゆかりさんとしては大人しくするしかないんだろうなあ。

「ですが会長。今回に限つては、その過程のところ、もうちょっと強調しても良かったんじゃないんですか？　そうすれば、総会のときのみんなの反応も、少しは変わつてたと思うんですが？」

「わからない？　自分の苦勞・功績をひけらかさない。そこが大和撫子の奥ゆかしさでしょ」

なぜか誇らしげに胸を張るゆかりさん。

「そうなんですか？　諦華さま」

いずみちゃんが、新聞を手渡しがてら質問する。

「バカね」。奥ゆかしい人間が、そんなこと自分で言うわけじゃない

呆れ顔のゆかりさん。

「そうなんですか？　諦華さま」

「あー、もう！　ホントじれつたいわね、あなたって子は！」

ふたりの掛け合いに、くすくす笑い声をたてながら、会長は新聞に目を落とした。

「だけど、この記事を書いた人、一体どういつもりなの？　大局の決した今、立つ波風なんて知れてるっていうのに。もしかして売名行為？」

ゆかりさんが忌々しげに新聞を見つめる。

「ああ、いますよね。著名人とかをこれみよがしに非難して、注目を集めようとする人」

「そうそう。世間で認知さてる人物を批判できる自分は、その人よ

りも上の存在ですごいんだっていう勘違いアピール？　そもそも、そういう連中って、反体制とか反権力とかを気取る連中と同じで、何かと対比させる形でしか自分という存在を示せないダメ人間なのよね。自分のダメさ加減をわざわざ公言するなんて、ホント、バカよね。そうじゃなければ、ただのやつかみ。娯楽・知識・利便性、その他諸々、人が求める価値を提供して、脚光を浴び続ける人間がいる一方で、人からちやほやされたくてたまらないのに、まったく見向きもされない矮小な自分がいる。だから、そんな才能を持った人たちが妬ましくってしょうがない。せめて悪口でも言って憂さ晴らし。大方そんなところでしょ。ホント、浅ましい。ほら、認めちやいなさいよ。別に恥ずかしいことじゃないのよ。下賤の人間にゲス根性が宿るのは、むしろ当然のことなんだから」

ゆかりさん、一体誰に向かって話てるんだろう？　視線の先にディスプレイがあるってことは、ネット上の誰かが仮想敵？

「もしかしてそういう発言、ネットでもしてるんですか？」

「当然。いるのよね、個人の特定が難しいのをいいことに、無責任な批判や提言を繰り返すのが。そういう奴には、はっきり言ってるのよ。自分の発言にきちんと責任を負う度胸も度量もないくせに天下国家なんて語るな！　このイカレチキン！　ってね」

「そ、それ、ちょっとヒドくないですか？」

「そう？　でも、私のやってるのは一種のカルト狩り。ボランティアよ、ボランティア。あるでしょ？　あきれる様なレスばかりで、良識人は見限って、同類ばかりが寄り集まって、ひとつのカルトのできあがりってことが。なかには普通に革命扇動とか犯罪者礼賛とかしてるのがあるから、ホント、引くわよ」

「それは、確かに……」

「ま、私が標的とする目安は、やたら自分の説に自画自賛的であること、自分の体験・経験・境遇を得意げに語る自己陶醉型、自分に肯定的な人間にはシッポを振って、否定的な人間にはソッポを向く排他性、それでいて議論歓迎とか平気で言うご都合主義ってところか

しら。これに当てはまれば、もうかなりの危険信号ね。そういう人間で、もう聞く耳とか持つてないから。いわゆる『自分の理想は、他人にとっても理想のはず。それが理解されないのは自分じゃなくて相手が悪い』とか本気で思い込むタイプ？　そういうのが徒党を組むと、違う考えの人に集団リンチとかするのよね。』

「うわ、そういうのって警察に任せたほうがいいんじゃないんですか？　まんま騒乱罪予備軍じゃないですか」

「そうね。だけど、楽しいわよ。矛盾点とかつついてやると、粗隠しのために、どんどん主張が支離滅裂になっていくから」

紅茶のフレイバーを楽しみながら、悪い笑顔のゆかりさん。あ、悪趣味……。

「でも、なんでそういう人って自分の主張に固執するんでしょう？　将来どうであれ、今実際に生きている人が魅力を感じてないってことは、結構重要だと思うんですが？」

「わかった！　変な電波を通じて、啓示とか受けてるんだよ、きつと！」

嬉々として語るいずみちゃん。対して、眉をひそめゆっくり首を横に振るゆかりさん。

小さく笑った会長が新聞から目を離す。

「なにかその人なりの信条でもあるのでしょうか。やたらと『こうすべき』『こうあるべき』とか言うのがその表れ。だけど、政策面にしろ、心情面にしろ、人の『こころ』を抑圧するような形のもの、多かれ少なかれ失敗する憂き目にあうのが世の常ね。『人はこころで動くもの』、そして、その『こころ』自体、自分自身でさえ理解も制御も不可能なブラックボックスなんですもの」

会長が、机の上に読み終わった新聞を載せる。

「どんなに正しいように思えても、人の知識なんて結局は辻褃合わせの理由付け。そんなものをいくら総動員したって、事の真相になんか辿り着けるものではないわ。何かを分析できたと主張する人は、一体何を根拠にそんなことを言うのかしらね。そんなあやふやな事

実をもとに、生き方を強要されるなんて甚だ迷惑。人の『こころ』をないがしろにしてまでやらなければいけないことなんて、この世には存在しないと私は思うのだけれども」

一呼吸置いた会長が、あごを指でトントントンしながら思案顔。

「しょせん浮世は夢うつつ 酸いも甘いもひつくるめ 楽しまずんばこれ如何」

言って優雅にひとあくび。これが会長の人生観？ ホント、気楽なもの。きつとこの人にとっては、すべてが暇つぶしの対象なんだろうなあ。それに付き合わされるこっちのほうがよっぽど迷惑。

「さ、それじゃあ、私は帰るわね。ところで、今日のエスコート役は誰かしら？」

会長がボクたち三人を交互に見つめる。

「諦華様、それなら私が……」

ゆかりさんがモジモジしながら立ち上がる。

「はい、はい、はい！ あたし、あたし、あたし！」

いずみちゃんが元気良く手をあげる。

まったく、ゆかりさんもいずみちゃんも、会長にべったりなんだから。そんなんだから、二人のことをみんな面白半分、やきもち半分で『会長のネコ』、『会長のイヌ』とかって言うんだよ。でも、当の本人たちは、それを良しとしているところがあるから、ホント理解できない。そんな会長ありきの呼び名、ボクはゼツタイ嫌だ。ど。

当然ボクは、知らん顔。

そんなこんなしているうちに、会長からの決裁が下る。

「ん。それじゃあ、今日は千里、お願いね」

「えっ！？ ボクですか？」

よりにもよって……。当然、厳しい視線の洗礼が、選に漏れた二人から注がれる。

「立候補者が二人もいるのに、なんでですかあ？」

「ゆかりは資料作成の途中よね。それに、いずみ。この間の議事録、

まだ完成してないんでしょ？」

「……はい」

ゆかりさんといずみちゃんが、しょんぼり肩を落とす。

「つまり、そういうこと」

薄く微笑む会長。

「そういうことってどういうことですか？ それじゃあ、ボクの『こころ』はどうなるんですかあ？ なおざりですかあ？ 抑圧ですかあ？」

「その話は道々聞いてあげなくもないわ。だから、ほら。行くわよ」
言うのが早いか会長は、さっさと扉に向かって歩き出す。

「そんなあ」

しぶしぶ付き従うボクの脇から、いずみちゃんとゆかりさんの捨て台詞。

「なにさ。カマトトぶっちゃって」

「天邪鬼」

えへ。『天邪鬼』はわかるけど『カマトト』ってなにいへ。

ささいな疑問とゆゆしき不平を抱えつつ、ボクは生徒会室を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9684u/>

百人異ッ種！

2011年10月21日03時18分発行